

エコロジーを思考する芸術表現

—— より豊かな〈美的共感〉のための試論

情報科学芸術大学院大学 大久保 美紀

発表者はこれまでの研究において、高度情報メディア社会における「親密な主題に関わる芸術表現」が他者に開かれ、個別の生の枠組みを超えて追体験・共有される局面に芸術的表現の領域横断的な有効性と意味を見出してきた。高度情報化社会のメディアを通じた異なる表現行為は、充溢し、凡庸で均質化した。ソーシャルメディアや没入的プラットフォームの経験、高度テクノロジーが支える異なる美的経験は、個人の身体・記憶・日常など親密な主題に関する芸術表現の他者による〈追体験・共感〉を可能にした点で重要であり、本発表はこうした理解に基づいてより豊かな〈美的共感〉に焦点を当てる (Okubo 2017)。

人間の活動が生態系に重要な影響を与える〈人新世〉のエコロジーは、1989年に『三つのエコロジー』を著したフェリックス・ガタリという言葉によれば、個人精神・社会・環境の連帯を必要とし、その足枷となる人間中心主義および西洋的二元論を乗り越える必要がある (Latour 2019)。しかし、今日のエコロジーを思考する芸術表現は、伝統的ヒューマニズムを批判しつつも、認識の限界に縛られている状況である。発表者は、「親密な主題に関わる芸術表現」とエコロジー思想を独特な方法で結び、アートが本来持ちうる影響力を発揮するために、芸術作品の鑑賞経験における〈美的共感〉を異なる視座から考察する。

ロベルト・フィッシャーが1873年に提唱した「感情移入」(Einfühlung)は、対象がそれを取り巻く世界と形作る美的関係を意味し、その類縁的諸感覚との関係性において繰り返し論じられてきた。一方、Einfühlungには、主体が滲み出すような自己投影において、主体をある種の「混合器」(eine Mischerin, Vischer 1873)として成立させる契機、つまり、「世界の矛盾、静と動、私と非私が流れ、謎めいた全体としてまとまっている流動媒体」とする次元があるという議論の豊かな含意については深化されていない。このような感覚こそ、主体が無生物にすら自己を投影し、非自我に移ろうメタモルフォーゼの経験と呼ぶべきものであり、擬人主義やアニミズムとの関係において解釈すべき「共感」なのである。感覚を通じて他の生を想像し、イメージによって自らの認識の枠組みを軽々と超越するフィッシャーの「感情移入」論に着目する。

発表ではまず、「混合器」をめぐる、ステファニア・カリアンドロの共感論、および、エマヌエーレ・コッチャのメタモルフォーゼの哲学を参考にし、フィッシャーのEinfühlungを再考する。そして、植物の記憶の遍在性を扱うジャン＝ルイ・ボワシエの作品「Crassula ubiquiste」(2014)、および、構造を描くことで木々を知覚するフランシス・アレのドローイングが喚起する芸術実践における共感を踏まえ、エコロジーを思考するアートが持ちうるより豊かな〈美的共感〉について明らかにする。